

子どもの主体性に基づいた図書委員会の活動

川西市立清和台小学校

教諭 稲田 拓也

1 取組の内容・方法

川西市立川西北小学校(前任校・平成30年当時)では、高学年の子どもが放送やボランティア、図書等いずれかの委員会に属して児童会活動が行われている。それぞれ年6回の委員会活動(特別活動)での話し合いをもとに学校のための活動を行っている。それまでの図書委員会活動は当番活動が中心で、奉仕的な態度を形成する上で重要な活動ではあるものの、初めから設定された仕事をこなすだけでは、学習指導要領第6章特別活動の第3の1の(2)に謳われた「児童による自主的、実践的な活動」には適わないと考え、図書委員自ら問題を解決したり目標に向けて活動を創り出したりする活動が必要だと考えた。

本稿筆者である私は、図書委員会の担当であり、図書委員担当の教員はほかにも2名おり、協議しながら委員会の運営を進めていった。

本稿では、子どもたちが主体的に計画・実行する活動をプロジェクトと呼び、それらを2つのタイプに分類する。ひとつは問題解決プロジェクト(以下、問題解決P)、もうひとつはオリジナル・プロジェクト(以下、オリジナルP)である。

問題解決Pとは、委員たちが活動をする中で図書室内の問題を発見し、解決に向けた話し合いを行い、実行する活動である。例を挙げると、一部の利用者が図書室内で騒ぐ問題、本が破損する問題、休み時間の開錠が遅れる問題等について話し合われた。

オリジナルPとは、図書室をよりよくするためのプロジェクトチームを結成し、自ら計

画・実行に取り組む活動である。オリジナル図書の制作，ビブリオバトル，本さがし大会，利用者へのしおりプレゼント等が行われた。

プロジェクトの準備段階では，図書室内に画用紙やカラーマーカー等を常備し自由に使える環境整備を行った。プロジェクトを完全に子ども任せにするのではなく，ある程度計画の妥当性や作業プロセスの進捗等について教員が助言を加えながら支援を行った。

問題解決P例 ポスターでの呼びかけ

図書室日誌の「気づいたこと」の欄には，子どもたちが日々の活動で感じたさまざまな問題が記述された。委員会の時間には，それらの解決にむけた話し合いを行った。

一例を挙げると，以前から図書室に常備してあった将棋をさしにきた利用者が勝負に盛り上がるあまり大声を出してしまい，読書の妨げになっているという問題があった。

委員会全員による話し合いでは，「図書室での将棋を禁止しよう」という強硬な意見も出たが，「読書スペースとは別に将棋のスペースを設けてはどうか」という双方の要望を認めた意見も出された。図書室内の空間的な都合もあり，将棋スペースを別に設けることはできなかったが，誰もが納得いく結論を導き出すための話し合いがなされたことは素晴らしいと思う。結論としては，「静かにすごそう」という呼びかけのポスターやカードを作成し，図書室内の壁や将棋の箱に貼ること，また，図書委員もできるだけ注意していくことという結論に至った。

オリジナルP例 オリジナル図書

あるグループは、オリジナルPとしてオリジナル図書（小説や漫画等）を次々執筆・発行していった。貸し出しはできないものの図書室の正式な図書として「館内」のシールを貼って本棚にならべ来室者が読めるようにした。多くの利用者が手に取り人気の図書となった。



オリジナルP例 ビブリオバトル

あるグループは、ビブリオバトルを企画した。ここでのビブリオバトルとは、複数の発表者が自分の推薦する本を紹介し、観客の「読んでみたい」という基準で挙手しその数を競うものだ。グループ内の2名が発表者となり休み時間に自分の推薦す



る本を図書室で発表し、来室した利用者が観客となってジャッジするという形式をとった。委員たちは、観客が何人来るかも分からない中、多くの人に参加してもらえるようポスターや放送で宣伝を行った。

当日は、数十名の参加者が来室し、楽しい雰囲気の中で開催することができた。発表者以外の委員は、司会やスタッフ等を務め、円滑な運営をサポートした。

2 取組の成果

図書委員の多くは、どの活動にも積極的に取り組んでいた。問題解決Pでは、図書室内での問題を発見し、その解決に向かって話し合い、導き出したアクションを実行に移す

という取り組みができた。オリジナルPでは委員たちが「もっと休み時間に図書室に来てもらおう」という目標から具体的な活動内容を自身でデザインし、計画・実行にむけて取り組めた。これらの取り組みは、学習指導要領第1章総則第2の2の(1)に謳われる「言語能力・情報活用能力・問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力」の育成に寄与した学習だといえる。

数字に表れた成果として、図書室の年間貸し出し冊数の総合計(1年～6年生の貸し出し冊数)が、前年度(平成29年度)と比較すると、8,683冊から9,378冊に約700冊近い増加がみられた。この数値には授業内での図書の貸し出しも含まれているので、一概に本プロジェクトによる影響がすべてであるとはいえないが、一成果として特筆に値する。

3 課題及び今後の取組の方向

今後の課題としては、子どもたちがより主体的に動けるようにするために教員が「どのような場面で、どのような働きかけ(助言、支援、環境整備等)を行うか」ということだ。とりわけオリジナルPにおいては、ある程度の自由を保障しているものの、その反面、自分たちで、何をどのように作っていくかをゼロから考えるという創造性を要した。また、可能性と制約を調整しながら段取りをしていかななくてはならず、コミュニケーション能力も必要となった。活動の計画・運営を生き生きと楽しむグループもあった一方で、話し合いを重ねても、なかなか実行に踏み出せないグループもあった。「どのような場面でどのような働きかけを行うか」という課題について、子どもや教員の持ち味、相互の関係性等個別の状況をふまえた上で一般化していくパラダイムを探っていきたい。